

## 「香りの誘惑」

山間の村に、古くから鎮座する神社の影が静かに横たわっていた。境内には苔むした石畳が続き、古木の間を縫う風が湿った土の香りを運んでくる。時折、遠くの花畑から漂う甘い匂いが、村の静寂に溶け込んでいた。

そこへ、村で唯一の由緒ある神社の養子としてやってきた少年、健太が足を踏み入れた。幼さの残る顔に、未知の世界への好奇心が宿っている。

健太を迎えたのは神社を守る一人娘、香織だった。白い巫女服に身を包み、長い黒髪が風に揺れるたび、仄かな花の香りが漂う。彼女の微笑みは穏やかで、その奥に秘めた情熱が垣間見えた。

「ここでは、神に仕える教えを授けるわ。でも、心で感じることが何より大切よ」

香織の声は柔らかく、どこか妖しい響きを帯びていた。

健太は彼女の言葉に戸惑いながらも惹かれていく。香織が近づくと、彼女の首元から甘い香りが漂い、彼の胸をざわつかせた。それは果実のような柔らかな匂いで、健太の心を静かに掴んだ。彼女は囁く。「健太くん、感じてみて」その言